

カプセルの中の「私」——「檸檬」論

序 「檸檬」の授業をめぐる一つの反省

梶井基次郎の「檸檬」ほど教え辛い教材もまたないというのが正直な実感である。学習者の方も何が描かれているのかわからないまま終わってしまったという印象を持つようだ。それどころか、檸檬一個の出会いによって〈幸福〉になったり〈有頂天〉になったりする主人公の心理に反発を覚え、さらに檸檬に爆弾と見立てて興奮する主人公に嫌悪感さえ抱いたりする。「檸檬」の主人公が示す自閉性の中に現実逃避を〈発見〉し、とても危ない人のように思われてあらわな不快感をしめすのである。下手をすれば、「檸檬」は、こんなネクラなアブナイヒトにはならないようににしましょうといった変に道徳的なお話で終わってしまう危険さえある。ネクラ人間が軽蔑され、演技的なネアカ人間が勝利する御時世がそのまま教室という〈空間〉で肯定され、「檸檬」は、学習者の状況と一度もクロスすることなく、ただ消費される〈モノ〉となる。ここでは、主人公が、「えたいの知れない不吉な塊」に「蝕まれて」生きる空間に〈場所〉を喪失し、「街から街を浮浪」、浮遊するほかなかったこと、そして、そうした〈空虚な主体〉である主人公は、「錯覚」の方法を用いることで自分の生きられる空

間「〈場所〉を必死になつて紡ぎだすほかなかつたのだ」という痛切な認識などはどこかに消えて行つてしまふのだ。

一体、どこから来て、どこへ行くのかという居場所、通路が閉ざされ、浮遊（ネアカ）するか、自閉（ネクラ）するかが唯一の自由であるような状況に学習者もまた立たされている。そもそも、ネクラ人間を「ハバカナ奴」として排除するネアカ人間こそ、自己の主体を消すことで全体に同化するという演技的・ピエロ的「生」を選択しているのであって、こころの空虚感は深いはずだ。いや、ネクラもネアカも「主体の空虚」という同根から発生した二つの現象のように思われる。してみれば、「檸檬」の主人公の抱えた問題は、何か遠い過去の「出来事」ではなく、まさに今、われわれに降りかかっている問題でもあるはずである。

ところで、それでは、どうして「檸檬」という教材はそうしたものとして教室という「空間」で取り扱えなかつたのであろうか。おそらく、その第一の理由は、「檸檬」という小説の「語り」の構造そのものからきているように思われる。

「檸檬」は、語り手「私」によって語られた主人公「私」のある一日の行動記録である。しかし、「私」は、「私」の行動を無批判的に語っているのではない。「私」は、あの檸檬一個の出会いによって「幸福」になつたり「有頂天」になつたりする「私」、さらに檸檬「爆弾」と見立てることで変に興奮する「私」を「えたいの知れない不吉な塊」に「蝕まれてい」た「あの頃」の「不可思議」な「私」の出来事としてかなり冷静に余裕をもつて語っている。ところが、この「語り」の構造が押えられず、いたずらに「私」||「私」として読まれ、語られた主人公「私」への嫌悪感、不快感をそのまま形成してきたのであつた。そしてまた、第二として、小説を読む読み手の制度的な思考の枠組、

すなわち主人公||作者という私小説的「読み」の慣習が主人公「私」が背負っている深刻な「ドラマ」を作者のレベル||「実生活」に還元することで、結果として檸檬一個の出会いによって「幸福」になつたり「有頂天」になつたりする「私」、檸檬「爆弾」と見立てることで変に興奮したりする「私」を「ハバカナ奴」「不幸な奴」とし、そのほんとうの悲劇性を見失ってきたのであつた。

1 「檸檬」の「語り」と歴史性

梶井基次郎の「檸檬」〔青空〕創刊号、25・1、後、創作集「檸檬」31・5 武蔵野書院所収〕は、「えたいの知れない不吉な塊」によつて「心」を「始終庄えつけられ」、「街から街を浮浪し続けていた」「頃」の「私」の「不可思議」な「日常」のひとこまを語り手である「私」が語るといふ手記風の小説である。過去の「私」を現在すなわちこの小説の執筆時点での「私」が回想して語っている以上、「えたいの知れない不吉な塊」に攻めたてられている「あの頃」の主人公「私」と、その「私」のある一日の出来事を語る語り手「私」とははっきり区別しておきたい。また、「学生」である主人公「私」と生身の梶井基次郎とはイコールではない。「私」の生きた「その頃」「あの頃」とは、京都の「学生」時代をさすが、「活動写真」、あるいは画家「アングル」の画本が丸善の店頭にならぶといふ事柄からおおよそ一九二一年前後と推定される。この時期は、梶井基次郎にとつての「三高時代」で、彼はデカダンス生活を繰り返していた。だから主人公「私」と梶井基次郎とはかなりの点で重なっている。しかし、「私」と、後に狂的時代とみずからいうデカダンス生活を繰り返していた生身の梶井基次郎とを等身大で結ぶことはできない。「私」は、生身の梶井基次郎とは一応区別された、「私」によつて

語られる「私」として登場しているからである。それでは、「私」は〈私〉によってどのような「私」として語られようとしているのか。まず、「檸檬」の冒頭はこうなっている。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終庄えつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか——酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また脊を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった。蓄音器を聴かせて貰いにわざわざ出かけて行っても、最初の二三小節で不意に立ち上がってしまったくなる。何か私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

たしかに、「檸檬」の主人公「私」は、デカダンスな生活を繰り返して、「肺尖カタル」「神経衰弱」「借金」などで苦しんでいた〈梶井基次郎〉を連想させる面をもっている。しかし、ここでは、「肺尖カタル」「神経衰弱」「借金」などが「いけないのではな」く、わざわざ「いけないのはその不吉な塊だ」とことわり、△「私」の中の「不吉な塊」に悩む青年として登場してきている。

「檸檬」における衝撃的な「事件」とは、まず、自己の内面を「蝕」み、空虚化するモノを生理的、身体的なレベルでの「塊」として捉えたということではないか。病めるころの状態をつくりだすモノを、〈私〉は不安感とかいった心理的なことばで置換していかない。いや、置換できない状況に立たされていたというのが正確である。たしかに、「塊」である限り、それは心身にとつて知覚できるモノ

ノとしてあることは事実であろうし、簡単に除去できるようなモノでもなかったはずだ。ただ、そのモノを〈私〉は出来合いの心理分析言語で言い表すことができなかった。何かによって「私」の心は確実に「蝕まれてい」るのだが、〈私〉は、その「私」の心の調和を乱すモノをまだ「塊」としてしかへ表現〓認識できないのだ。もちろん、そのモノ〓「塊」は「私」に「焦燥」「嫌悪」をもたらし、たえず「居堪らずさせ」「追いたてる」モノであった。しかし、その原因たる〈モノ〉が「何か」かは「塊」以上には言葉化できなかった。だからこそ、その〈モノ〉〓「塊」は「私」に「焦燥」「嫌悪」をもたらし、たえず「居堪らずさせ」「追いたてる」モノであった。しかし、その原因たる〈モノ〉が「何か」かへ〈不吉〉なモノとして「私の心を始終庄えつけて」「私」の存在を脅かし、脱出の契機をつかむこともできず、「街から街を浮浪」するほかなかつたのであった。

主人公が生きた一九二一年前後、知識人は、それまでの安定した心という領域を崩されつつあった。国家の内部に新たな価値観が発生、浮上してきたからである。かつて臣民としての知識人は、文明開化、富国強兵たる国家に奉仕することでそのアイデンティティが保証されていた。しかし、国家の内部に新しい否定することのできない勢力、すなわち民衆、労働者が発生し、固有の国家、文化を主張し始めてきた時、彼らはどちらを指示、選択するかという難問を抱えることになった。それは知識人のアイデンティティを根底から脅かすものとして浮上してきたのだ。有島武郎は、「宣言一つ」(一九二二年)を書き、新興勢力に加担することのできない自己を無力感をもって語った。芥川龍之介は、一九二七年に自殺するが、未来への「ぼんやりとした不安」を語っていた。国家の内部に進行した〈価値観〉の分裂は、将来の知識人たる学生にも大きな力で働き、彼らの存在を根底から揺さぶってきたのであった。安定した世界は崩れ、どちらを、何を選択するかをめぐって学生はその存在を脅かされていた。社会の価値観の分裂は、へえたいの知れない不吉なモノとして学生に迫っていたので

あった。それは、逃げることができないうパワーとして学生の「心を始終圧えつけていた」のであった。たしかにそんなモノは学生にとつて「嫌悪」以外のなものでもなかった。しかし、それは間違いないく、学生の安定したアイデンティティを脅かし、「焦燥」感を駆り立てた。学生の「心」という領域を侵犯し始めたこの恐るべきパワーは、何が「善」で、何が「美」であるかわからなくなる心の混沌を作り出し、等しく空虚感を抱えることになった。心への絶対的な信仰、信頼がゆらぎはじめるのもまた必然でさえあった。「檸檬」の主人公はこうした時代の中で生かされていたのであった。

「檸檬」にはあらゆる「モノ」が氾濫している。心もまた一つの「モノ」である。「塊」であった。心がモノ化されて眺められる以前、心はあらゆるものに先立って先験的、あるいは実体的に「ある」ものとして観念されてきたし、肉体と分離された上位のものとして自明化されてきた。人間の内部には「心」という領域がはつきりあり、それはしばしば自我、精神、主体という言葉で語られてきた。ところが、「檸檬」では、心も一つの「塊」というモノでしかなかった。ここでは、知識人にとつて自我とか精神とか主体とかいった絶対化され、実体化されてきた「心」という領域、すなわち心というものの近代的観念、発想の枠組そのモノが価値観の分裂によって「蝕まれて」きていた。心は絶対的に「ある」モノとしての神話性を奪われ、異物「塊」を抱える「えたいの知れない不吉」な「モノ」
として意識されはじめたのであった。

それにしても、「檸檬」の語り手「私」の関心は、この肝心の「不吉な塊」の説明に直接向かってはいかない。せいぜい、主人公をして「焦燥」感、「嫌悪」感に駆り立てるモノ、たえず何かしら主人公を「街から街」へと追い立てるモノという形でしか語ろうとせず、語り手「私」の関心は、そのモノ「塊」によって脅かされた主人公のある一日の状況を語ることにのみ向かって行く。つまり、

「不吉な塊」に対する「私」の対症療法のみが語られていくのである。主人公「私」も、その主人公を語る語り手「私」も、もともとそういう「日常」を強いる根拠、原因たる「不吉な塊」自体を問いつける姿勢を持ち合わせていない。

この点について、三好行雄は、「青春の虚像——「檸檬」梶井基次郎」(三好行雄著作集第五卷「作品論の試み」93・2、筑摩書房)の中で、「放蕩無頼な生活の風景が、「檸檬」では消える」点、すなわち、「肺尖カタルや神経衰弱や「脊を焼くやうな借金」などのおもさが消えて、へえたいの知れない不吉な塊」のおもさだけが残る」という「檸檬」における「不吉な塊の実体感」の重要性を指摘している。

ところが、どうしたことであろうか、これまでの「檸檬」論では、心のある状況が「塊」へモノ化されて表出されたという意味性や、語り手「私」が「私」の一日の行動「体験」をしきりと「不可思議」「不思議」「馬鹿げたこと」と批評している点が看過され、語り手「私」の語ったある一日の「私」の「不可思議」な「行動」——檸檬との出会いから檸檬爆弾による丸善爆破の話——からのみ「不吉な塊」とは何かが問いなおされてきたのであった。

「不吉な塊」をめぐるさまざまな解釈の主線の一つは、肺病、神経衰弱、借金、深酒ということを根拠にした青春の生あるいは死をめぐる「不安感」というものである。もともと、「私」は、「不吉な塊」とは、「私」の「肺病」「神経衰弱」「借金」とかの実体的なものへ還元されない何かだとしていねいにこわっていた。それにもかかわらずこうした解釈が生まれてきたのは、作者の実体的なモノに還元しなければ安心できないという私小説的読みの伝統に読み手が深く呪縛されてきたからである。今一つは、「みすぼらしくて美しいもの」にひかれ、丸善へヨーロッパ文化、高貴な文化の象徴を嫌悪する「私」に着目することによって、ヨーロッパ文化をめぐる葛藤、対立、不安から「不

吉な塊」を説明する線である。前者の解釈に立つ時、「檸檬」は「生の不安」を象徴する最高のテキストとなる。『檸檬』が高校教材から取り除かれなかった最大の理由もまたここにあった。後者の解釈に立つ時、檸檬との出会いから檸檬爆弾による丸善爆破の企てという「私」のある一日の行動は、憂鬱なる「不吉な塊」からの脱出として一応説明がつくことになる。しかし、これとて、「私」のきわめて偶然的な観念上の企てでしかなく、丸善爆破はヨーロッパ文化への抵抗とするには無理がある。そもそも、ここでは、観念上の「企て」という「私」の行為が問題なのであり、「不吉な塊」とはヨーロッパ文化をめぐる葛藤、対立、不安などでは説明不能な、あるいはそれを越えた不可視なある何へモノへかだった。

2 「不吉な塊」からの遁走——へもう一つの「私」へ

「私」の「へ心という領域」に「えたいの知れない不吉な塊」が侵入してきた結果、「私」は何をしてもはや「幸福な感情」を抱くことができなくなった。何かが「私」を「圧えつけ」、「追いたて」て「居堪らず」させ、「辛抱がならなくなった」ためである。「私」は「私」で「へある」ことができなくなったのである。かつて、学生の「私」が「私」で「へある」と実感できたのは、「音楽」であり、「詩」であり、「画本」であり、はたまたそれらが集積している丸善という空間＝場所であった。「私」は、素直に、「私」が「私」で「へある」ことができた丸善という「場所」をこういうふう語っている。

生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであった所は、例えば丸善であった。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壺。煙管、小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあった。そして結局一等いい鉛筆を一本買う位の贅沢をするのだった。然し此処ももうその頃の私にとっては重くらしい場所にすぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のように私には見えるのだった。

「不吉な塊」に「蝕まれ」た「私」にとって、もはや丸善は「私」が「私」で「へある」ことができる場所＝空間ではなく、「重くらしい場所」になってしまった。かつて「私」は、「音楽」「詩」「画本」や舶来品の集積する丸善という場所＝空間の住人であることで、その近代の進んだ薫りを感じ、「あまりに尋常な周囲」＝「世俗の空間」との違和感、つまり「あの変にそぐわない気持」を楽しんでいた。しかし、「不吉な塊」は、そんな「私」が「私」で「へある」ことのできる場所＝空間を奪い、感性そのものをも変質させてしまったのであった。「私」を「喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった」という事態はこの「私」の感性の変質を暗示している。「私」の生きる場所＝空間を奪い、感性をも変質させてしまった「へモノ」、それが「不吉な塊」というモノであった。

さて、いわゆる丸善的な「へモノ」に「のしかかってゆかない」ようになった「私」の「変質」した感性は、それではどんな「へモノ」に「のしかかって」いったのであろうか。

何故だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えてゐる。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしても他所他所しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転してあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰つてしまふ、と云つたような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかっていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とすると吃驚させるような向日葵があったりカンナが咲いていたりする。

「私」の感性は、「美しい音楽」「美しい詩」の世界から離れて「見すばらしくて美しいもの」の世界に「強くひきつけられ」、そこで、「喜」ぶことになる。「壊れかかった街」「裏通り」に親近感を覚え、野性的な「向日葵」「カンナ」などに「喜」びを見出し出ていく。

時どき私はそんな路を歩きながら、不図、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起そうと努める。私は、出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかった。第一に安静がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。其処で一月程何も思わず横になりたい。希わくは此処が何時の間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへと想像の絵具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

すでに誰かの手によつて産出された美の世界に辛抱できなくなつた主人公は「錯覚」の力、すなわち想像力によつてもう一つの「非現実の世界」を産出しようとして努力を繰り返している。どんどん「想像の絵具を塗りつけてゆく」ことで、その架空の世界に入ること、「現実の私自身を見失うことを楽しんだ」のである。「落魄れた」「無気力」な主人公の「触角に寧ろ媚びて来る」「見すばらしく美しいもの」を探すことで「幸福」を得ようとしたり、あるいは「錯覚」ゲームを「楽しん」でいたのである。これが、主人公の日常であつた。

「私」は、自分の今の感性にフィットするモノを求め、また「錯覚」——想像力を機能させることで必死になつて「私」が「私」でへある、ための新しい関係を作り出そうとしていた。今の「私」に見合つた場所——関係の一つが、西洋的な「美しい音楽」や「美しい詩」とは異質な「美」——「見すばらしくて美しいもの」——路地裏の美の世界であつた。「花火」とか「おはじき」とかが好きになつたりしたが、これとて、かの丸善の空間に象徴される高価で、きらびやかな「美」の世界とは異質な「二銭や三銭のもの」と云つて贅沢なもの。美しいもの——と云つて無気力な私の触角に寧ろ媚びて来るもの——そう云つたものが自然私を慰め「だからであつた。いずれにしても、「裏通り」、路地の世界は、丸善と異質な世界であり、異質な「モノ」が溢れていた。「私」の「街から街」への「浮浪」は、そういう「モノ」、風景との出会いであり、発見であつた。

それにしても、「現実の私自身を見失うのを楽し」むとは、「私」がへもう一つの私になることであつた。この願望は、脱出とも少し違つている。脱出とはへより発展した「私」になるというニュアンスがふくまれる。「檸檬」の「私」がめざしたのは、まったく別なへもう一つの私になること

であった。

3 檸檬との出会い——「心という奴」の「不可思議」さ

ある日、「私」はいつものように裏町を徘徊し、駄菓子屋、乾物屋を眺めながら果物屋で「足を留め」、その店には珍しい檸檬一つを買った。かつて、「私」は丸善で「二等いい鉛筆を一本買う」「贅沢」をしたのだが、今、裏街でちょうど同じ一つの「贅沢」をしたのだった。もともと「私」は、檸檬の「単純な色」「丈の詰った紡錘形の恰好」が好きであった。「檸檬」では、この檸檬との出会いを次のように語っている。

結局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私は何処へどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いてきた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んで来たともみえて、私は街の上で非常に幸福であった。あんなに執拗かった憂鬱が、そんなものの一類で紛らされる——或いは不審なことが、逆説的に本当であった。それにしても心という奴は何という不可思議な奴だろう。

語り手へ「私」は、熱っぽく「私」と一つの檸檬というモノとの運命的な出会いを語り、さらに、その「檸檬」一個でかの「不吉な塊」から解放され、何ともいえない「幸福」感なり、「昂奮」状態を体験している「私」を語っている。言うまでもなく、この「幸福」感は、檸檬の「単純な冷覚や触覚が「本当」のことであった。

その重さこそ常づね私が尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さは総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思いあがった諧謔心からそんな馬鹿げたことを考えて見たり——何がさて私は幸福だったのだ。

「私」は檸檬一つで、「執拗かった憂鬱」が「紛らされ」ただけではなかった。檸檬は、「私」の「心」という領域へ「身内」に「元氣」を復活させ、さらに、「私」自身を「美的装束をして街を闊歩した詩人」に変身させてくれるモノでもあった。檸檬は、「不吉な塊」に蝕まれて裏街を「浮浪」する貧乏な学生であった「私」をまったく新しい「もう一つの「私」」に変身させてくれたのである。「私」が檸檬の「重さ」をたとえ「思いあがった諧謔心」からにせよ、この「重さこそ常づね私が尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さは総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算してきた重さである」と「馬鹿げたことを考えて見たり」したのも、檸檬というモノがともかく「私」を「幸福」にしたという動かしがたい「事実」へ「心という奴」の「不可思議」さの体験があったからである。

ところで、ここで、問題にしたいのは、自「私」の心の不調和を生成する「モノ」へ「塊」が、檸檬一

個で消えてしまったという奇妙な体験こそ、「檸檬」における最大の事件であったという点である。どんなに振りほどこうとしてもまとわりついて振り払うことができなかったしつこい心の「憂鬱」。「塊」がたまった檸檬「一頭で紛らされ」、「浮浪」する「私」が「美的装束をして街を闊歩」する「詩人」に生まれ変わったという点である。ここで、語り手「私」は、「心という奴」の「不可思議」性を語っている。そして、その心の「不可思議」さとは、心の「塊」というモノと檸檬というモノが交換されたというまさに心の「軽さ」のごとであった。

この心の「軽さ」の問題は、例えば「羅生門」において状況に振り回されてしまう下人の心理を通してすでに芥川龍之介によって捉えられていた。「檸檬」では、状況ならぬ檸檬というモノによって交換されてしまう形でその「軽さ」が捉えられている。一体、人間の「意識」〈言葉〉〈思想〉〈観念〉すなわちこれまで自我とか、主体とか内面とかいわれられて信仰されてきた人間の心という神話が崩されて行く時期こそ、この時代にほかならなかった。マルクス主義もまた、心が階級的、歴史的に構成されるモノではないことを説いていた。心というモノの幻想性が剝がれてくる歴史的瞬間こそ、まさに大正から昭和への転換期にほかならなかった。

心の「軽さ」の問題は、自己が自己で「へある」と実感された時代の終焉、すなわちアイデンティティの危機の時代を語っている。「檸檬」の主人公「私」は、「不吉な塊」によってこの自己が自己で「へある」世界を喪失した人間として登場してきていたのであった。

ここで、「檸檬」の主人公をもう少し、歴史的なコンテクストの上において眺めてみることにしよう。

この時期、書かれている作品は葉山嘉樹の「淫売婦」、川端康成の「伊豆の踊子」、横光利一の「頭ならびに腹」等がある。これらはいずれも新しい作家たちによる作品である。「淫売婦」、「伊豆の踊子」は傾向の違う作家の作品であるが、共通しているのは貧困への暖かい眼差しである。しかし、ここには、心の「軽さ」への認識はなく、心に関する絶対的な信仰、信頼は少しの「ゆるぎ」もない。「頭ならびに腹」は、静止した点から動くものを捉える従来の方法が逆転し、何よりもスピード化する都市への鋭い問題意識が作品を覆い、人間を描くのにもはや「内面」⇨心理からのアプローチは断念され、「モノ」化された「頭」「腹」を通して描かれようとしている。その限りでは、「檸檬」は、「頭ならびに腹」にかなり近いところにあつた作品と言えよう。しかし、「内面」の喪失、生きる空間⇨「場所」の喪失といった深刻な事態が準備されているわけではなかった。

そもそも、自我とか精神とか主体が幻想でしかないと一般的に意識され、近代的観念、発想の枠組が根本的に問われはじめるのは最近になってからである。「檸檬」の主人公は、そうした問いかけが一般化するはるか以前にその状況を生きていたのであった。

4 もう一つの「現実」、あるいは作家生誕の物語

晴れやかな詩人に変身して「幸福」感に浸り、裏街から表通りに出てきた主人公は、変質した自己の感性も忘れて「丸善の世界」に「易やすと入れる」ように思われた。しかし、入るや否や、「私」の感性は、そこにある「モノ」に心が「のしかかつてはゆか」ず、たちまち「憂鬱」感に取り囲まれてしまう。もはやどんな画本、画集の美にも感性はなびいていくことがなかった。そこで、「私」は、それらの取り散らされた本を「手当り次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげ」たり

した。それは、「私」にとつて「奇怪な幻想的な城」に見えた。さらに、「私」は「軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた」。「私」を「幸福」にし「元氣」づけてくれた「お守り」^(まもり)。檸檬をその「架空の城」の「頂き」に置き、周囲との違和を確かめようとしたのであった。期待通り、そこだけが「変に緊張している」^(あ)「世界」のように見えた。幼児の積木遊びに似た遊びに「私」は心を「跳」らせながら、さらに、次のように「想像の絵具を塗りつけて」いった。

不意に第二のアイディアが起つた。その奇妙なたくらみは寧ろ私をきよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、何喰わぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐったい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行った。

変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉葉みじんだろう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な赴きで街を彩っている京極を下って行った。

何のことはない。架空の城の「頂き」に置いた檸檬を「爆弾」と見立てただけのことである。この時、「私」は、「美的装束をして街を闊歩した詩人」ではなく、「黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢」に変身している。

丸善の「現実」は何も変わることはない。ただ、「私」は、「もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう」と思い、「あの気詰まりな丸善も粉葉みじんだろう」とその「想像を熱心に追求」しながら賑やかな「京極を下って行った」だけのことであった。対象（丸善）との「憂鬱」で「重くするしい」関係性を、「私」は「私」の認識の枠組をずらすことで断ち切り、その勝手に想像した架空の世界を「私」だけの「現実」として生きていたのであった。

想像された架空の世界をあたかも「一つの現実」であるかのように受け止めて生きる「生」のスタイルは、ここで初めて採用されたものではなかった。京都の「壊れかかった街」の「裏通り」の空間を「京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起そうと努め」ていたあの営為と同質なのである。もちろん、ここで、「私」が全く同じ「錯覚」の論理を機能させているわけではない。「錯覚」は、宮城とか長崎へと「場所」を転移しているのではなく、「場所」そのものを変えること＝爆発を試みている。逃避的ではなく、より攻撃的な「錯覚」の論理の駆使であった。ただ、そういう変化はあるにしても、それは、「架空の世界」を「私」の現実として生きる「生」のスタイルがまもなく破られるということを意味していない。「不吉な塊」に脅かされている「私」は、「架空の世界」を「私」の現実として生きるほかなかったからである。

ところで、「架空の世界」を「私」の現実として生きるという「私」の「生」のスタイルは、「檸檬」に先立つ習作「瀬山の話」段階では容認されていなかったようだ。そもそも、「檸檬爆弾」なる発想は、「狂人芝居」であり「時間潰し」程度の認識しかされていなかった。デカダンスな生活をし

ていた自己（私）梶井基次郎の〈私性〉が昇華され、「えたいの知れない不吉な塊」に蝕まれた「私」という認識（私）が生まれた時、その「私」の余儀なくされた〈生〉のスタイルという認識もまた生まれたのであった。

東京書籍『新編現代文 新訂版』指導書によれば、「作品の主題は、檸檬を爆弾に見立て、それを「熱心」に願うところにも現れているように、想像力による現実認識の変革を企てるということであろう……（略）……主人公は、錯覚を積極的に起こすことによって、現実からの脱出を計った。この作品において、主人公と作者とは等身大と考えてよく、梶井基次郎は、想像力という心理操作によって錯覚を引き起こし、錯覚の結像した幻覚の中に現実と自己との関係の改変を願ったのである」とある。ここには、作者と主人公が「等身大」として扱われている古き、さらには、「現実と自己との関係」などといった旧態依然とした現実と虚構の二項対立図式が入り込んでいる。しかし、最大の問題点は、「作品の主題」を「想像力による現実認識の変革」に求め、「現実からの脱出を計った」とする点である。

一体、「檸檬」の主人公は、〈感性〉と「錯覚」（私）の想像力によって架空のへもう一つの「私」の世界を構築し、その世界に生きるほかなかった。その世界に〈現実性〉、リアリティを感じて生きているのが「私」という青年であった。その限りで言えば、「現実からの脱出」も「現実認識の変革」もかなわぬ地平に生かされていたのであり、そこにこそ、「私」の立っていたしんどさがあった。「私」にとって「私」が果たして何者かがわからなくなったように、現実もまた希薄なものでしかなかったのだ。「私」と〈現実〉（私）世界の関係が朦朧としてきたのであり、したがって、自分が「錯覚」によって構築した架空の世界こそ〈現実〉だとする倒錯も生まれたのであった。「私」が直面してい

たのは、自明化され、絶対化されてきた〈心〉というものの神話性であった。自我とか精神とか主体とかいった絶対化され、実体化されてきた近代的観念、発想の枠組そのモノが〈ゆるぎ〉はじめていたのだ。なにしろ、心に関する絶対的な信仰、信頼が〈ゆるぎ〉、檸檬という〈モノ〉と心という〈モノ〉（私）が交換されてしまうというほどに〈心〉という領域は「重さ」を喪失していたのである。実際、そうでなければ、檸檬の「重さ」をたとえ「思いあがった諧謔心から」にせよ、どうして「この重さこそ常づね私が尋ねあぐんでいたもの」だとか、「この重さは総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算してきた重さである」などといったことが思い付くことがあるか。事実、「心という奴」がそんなに〈軽く〉て実体性を持たなくなっていたからこそ、「私」は、「自己」という観念以前の自己なるもの、すなわち言葉以前の〈私の感性〉に頼り、その「私」の〈感性〉と世界・モノ・風景との交流によって産出された世界、あるいは自分の「錯覚」（私）想像力の論理によって構築した〈非現実〉の世界を〈現実〉として生きていくほかなかったのであった。こうして、「檸檬」の語り手である〈私〉は、「私」の感性・「錯覚」（私）想像力を頼りに〈架空の世界〉を生きるほかない「私」の余儀なくされた空虚な〈生〉を語ったのであった。〈私〉は、そうした「私」の〈生〉のスタイルについて、しきりと「不可思議」「不思議」「馬鹿げたこと」だと批評している。しかし、檸檬一つで「幸福」になったり「昂奮」したりする自閉的なお話がいかにか「馬鹿げたこと」ではあっても、間違いなくその日その日「私」は生きたのであり、そのようにしか生きられなかったのであった。

一体、「私」は、安定した居場所をうしなうて京都の街を浮遊した苦しみの理由、原因についてはじめわからなかった。「えたいの知れない」何かによってさまよっていたことは理解できたにしても、

そうさせているモノが何物かわからなかった。しかし、それが、「不吉な塊」であったと言葉化し認識しえた時、「私」はようやく「馬鹿げた」「私」の体験（青春）を語る事が可能になった。〈私〉は、これまでの「私」と世界（モノ）との安定した関係が崩され、その結果、自閉的な世界の中でしか自己のアイデンティティを回復するほかなくなった悲しい「私」という一人の男の物語を語った。そして、「私」にそうした空虚な〈生〉を余儀なくさせたモノこそ、「私」を支えていた心という〈制度・観念・ことば〉の溶解としての「不吉な塊」であった。

「檸檬」の終末部、「私」は、裏町から賑やかな表通りへと出て行く。しかし、それは、「私」が「現実からの脱出」を果し、おめでたい市民生活へと復帰していく道ではなかった。ましてや、「不吉な塊」を背負うヒトとヒトとの関係の中に入っていく道でもなかった。「私」が「私」の感性、想像力に全面的に依拠することでへもう一つの現実を構築し、そうすることで「私」のアイデンティティを必死に回復していく方向、すなわち、「私」が〈私〉になる道であった。「檸檬」は、〈私〉が、「不吉な塊」によって〈自閉〉していく「私」を語った小説であるが、同時に、〈私〉は、「私」が〈私〉にならざるをえない必然をもまた語っていたのであった。

注1 中村博保は、「檸檬」反生活者の絵本（二）いかに読むか 記号としての文字 81・11、中教出版）の中で、「不吉な塊」とは、みずからの眼によって透視された内なる自己、病み苦しんでいた自己そのものであったのだ」とし、「檸檬」という小説の主題を「一顆の檸檬を介して、見るということの構造と意味を書き示した」点に求めている。

注2 勝又浩の「檸檬と丸善——梶井基次郎」（『都市の常民たち 作家のいる風景』94・4、勉誠社）からの引用。

同論文は、丸善に「文化的、文明的な意味での資本主義の象徴」という視点から論じている刺激的な論文。なお、芥川龍之介の「将来に対するほんやりとした不安」との共通性をも論じている。

注3 三好行雄は、前掲論文において、「大正から昭和へかけてのいわゆる転形期は、時代のやまいに身をもつたちむかう不毛な青春を強いつつあった。倦怠、終末感、絶望など、さまざまにいいかえることのできる病巣が青春の内面をむしばみ、かれらから現実の行為の可能性をうば」ったとして、「行為によって変ええない世界を、感覚によって、感受性によって変えようとするところみ」が「檸檬」であったと述べている。

*本文引用は、新潮文庫「檸檬」（67・12、新潮社）による。